

ペスときょうだい

小川未明

青空文庫

風の吹くたびに、ひからびた落ち葉が、さらさらと音をたて、あたりをとびまわりました。空はくもつて、木の枝がかなしそうにうごいています。急にお天氣がかわりそうでした。

「雪がふると出られなくなるから、ちよつと、となり村まで用たしにいつてくる。」と、父親は、身じたくをしながら、いいました。

「その間にぼくは、外につんであるまきをかたづけしておこう。」と、兄の太郎がいました。

「あまり暗くならぬうちに、お父さん、かえつていらつしやい。」と、弟の秀吉はいいました。

「ご飯がにえたら、お母さんにあげて、先に食べておしまい。」と、父親は、戸口で兄弟に注意して、空をながめていましたが、

「寒さがちがうから、今夜は雪だろう。」と、いいました。

このとき、ペスは犬小屋でねていました。いつもなら、とびだしてきてあとをおうのですが、どうしたのか、音もたてなければ、姿も見せませんでした。

「ペスをつれていけないの。」と、太郎がいました。

「ねているなら起こさずにおいておやり。」と、そのことばには、やさしみがありません。そして、もう父親は、門の方へ歩いていたのでした。

兄弟は、しばらくそこに立つて、父親のうしろ姿を見おくりましたが、見えなくなると、

「ペスのやつ、気分がわるいのかな。」と、弟の秀吉は、小屋をかえりみながら、まず口をひらきました。

「なに、おうちやくなんだ。きげんのいいときはしかつてもついでくるが、わるいときはよんでもきやしない。」と、兄の太郎は、いまいましてうにいいました。

「しかし今日は、気分がわるいのだろう。」と、秀吉はペスの弁護をしました。あまり兄がおこっていたからでした。

「だってそうじゃないか。お父さんはペスの恩人なんだぜ。犬ころしにつれられていくところを、お金をやつてたすけなかつたんだ。こんな小さいうちに命をとられるのは、かわいそうだといって。」と、太郎がそのときのことを思い出していうと、

「ほんとうにうちへきたときは、ころころとしてかわいらしかったね。」と、秀吉もう

なずきました。

「そのご恩をわすれては……。」「

「ペスはありがたく思っているんだよ。家じゆうで、いちばんお父さんになついているだろう。」「

「それならこんな日にこそ、おともをするのがほんとうなのだ。」と、兄は口ごごとをしながら、前のあき地につんであつたたきぎを一本ずつとりあげて、長いのをのこぎりできき、太いのはなたでわって、てごろにできあがったのから、なわでくくりはじめました。また弟は、炉に松葉をくべたり鉄びんをかけたりにして、夕飯のしたくをしていました。お母さんがかぜをひいてねていられたので、いいつけられた用事をしていました。

北風の吹くたびにかさこそと、まどの外では木の葉のとぶけはいがしました。

そのとき、力のこもるちようしで、ドント、ドント、ドント、ナミノリコエテ……と、兄がはたらきながら、出船の歌をうたっているのが聞こえました。

そのうちに、だんだんとあたりが暗くなりました。

「秀ちゃん、まだご飯にならない。」と兄が外から声をかけました。

「いま、お母さんにあげたところだ。」「

「ちらちら雪がふつてきたよ。」

「えつ、雪が。」と、弟はこう聞くと、すぐに戸口までとびでました。灰色の空をあおぐと、やわらかな白いものがおちて、つめたく顔にあたりました。

「ごらん、あちらの山も森も、みんなはやまっ白になったから。」と、兄はせわしそうにたきぎを勝手もとへはこびながら、いいました。やがて仕事がおわって、兄は流しで手をあらっている、土間のかたすみで、ペスが、弟のあたえた飯を食べているのが目に入りました。

「どこもわるくないのに、ずるいやつだ。」と、太郎はしたうちしたのです。

夜になると、兄弟は、ともしびの下でくりをやいたり雑誌を見たりしていました。ふけるにつれてヒユウヒユウと風がつのり、パラパラといって、吹雪がまどにあたりました。「お父さんは、暗くしておこまりだろう。ぼく、とちゅうまでむかえにいこうか。」と、秀吉が外へ耳をすましながらいうと、

「いいえ、むかえにいかなくても、だいじょうぶです。お父さんは知り合いがおありですし、おまえのほうがしんぱいですから。」と、つぎの間にねているお母さんがいわれました。

「ペスがついていけばよかつたんだ。」と、兄はまたくりかえしました。

「どこかわるいんだよ。さつきお宮の境内へしいの実をひろいにいったとき、呼んだけれどこなかつたのだ。いつもならよろこんでとんでくるのに。」と、秀吉はペスをかばうつもりでこたえました。

「それなら、なにも食べられそうもないのに。」と、ペスが音をたてて、ご飯を食べている姿を、兄は思い出したのでした。

くりのこげるにおいが、つめたいへやの空気へひろがりしました。けれど兄弟は、外のあらしに氣をとられるので、おちつかなくなかつたのです。兄はなんと思ったか、立ちあがると入り口へ出て、戸をあけました。弟もじつとしていられずついてくると、ペスもそばへやつてきました。

「ペス、お父さんをむかえにいくんだ。」と、太郎は命令しました。

「いくら犬でもわからないだろう。」と、秀吉は反対しました。

兄はそれに耳をかたむけないで、むりにペスを寒いやみの中へおいだしました。赤と白の敏感な毛色の動物は、しばらく、なにを考えるか、吹雪の中でふるえてみえました。「早くいけ。」と、はらだたしげに兄はいつて、手あらく戸をしめたのです。

秀吉が戸をあけたときは、もうペスのかげはそこになかったのです。ただしきりとふる雪が、すきまをもれるともしびにてらされたばかりでした。

「どこへいったかな。ペスはもうおらないよ。」と、秀吉は炉ばたへもどると兄を見ました。兄は下をむいて、黙っていました。

それから三十分もすぎたころです。戸口でだれか雪をはらう音がしました。

「お父さん。」と、秀吉は出むかえました。

「ペスはいきませんか。」と、太郎が聞きました。

「いや。どうして。」と、父親はふしぎがりました。

「むりにお父さんをむかえにやったのです。」と、太郎がいわけしました。

「どの道かわかるまいが、どこへいったかな。」と、父親は考え顔をしました。

「もうかえないよ。」と、急に秀吉は悲しくなって、声をふるわせました。

「そんなことはあるまい。小犬ではないからな。」と、父親はわらいました。

秀吉は父親のことばで、いくらか安心しました。そして明日になれば、お母さんはおきられるとおっしゃるし、雪の上をペスとあそばれると思うと、うれしかったのでした。

けれど、太郎だけは、ペスのことがさすがに気にかかるのみえて、戸口に立つて口ぶえをふいたりしました。

「どこへいくものか。もう寒いからやすんだがいい。」と、父親は先に座を立たれました。続いて兄弟もへやへ入って、床に入りました。弟はすぐにねむったけれど、兄は容易にねむりつかれず、吹雪の中をさまよっているペスの姿を想像しました。

真夜中ごろでした。秀吉はふと目をさますと、兄をおこさないようにそつと床からぬけだして、犬小屋へいつてみました。中はがらんとして空だったので、せつかくわすれた悲しみが、また新しく全身をしめつけました。しばらく、なきだしたくなるのをこらえて立っている、遠く石をころがすような海の鳴り音がきこえました。

その夜のあげがたのこと、ゴトンと、なにか雨戸へあたる音がしました。

「ペスかな。」と、兄はすぐはねおきました。二人ともちようど目をあけて、ペスのことを思っていたので秀吉は、

「にいさん、ペス。」と、聞きました。

「いや、風の音だ。」と、兄はしおしおとまた床へもぐりました。しばらくすると、

「夜があけたら、ペスをさがしにいこう。」と、兄はひとりごとのようにいました。

「兄にいさん、ぼくもいつしよにいくよ。」と、秀吉ひできちはいいました。このとき、兄あには兄あにで、
 かわいそうなことをしたと後悔こうかいしたし、弟おとうおとうとは弟おとうとで、自分じぶんの力ちからのたらぬばかりに、とりか
 えしのつかぬあやまちをおかしたと、良りょうしん心にせめられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「未明新童話集」太平社

1954（昭和29）年7月

初出：「幼年クラブ」

1948（昭和23）年1月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ペスときょうだい

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>